

## 『日本沈没』のクリアな視線

二〇一一年三月十一日の東北地方太平洋沖地震直後、あえていま『日本沈没』を取り上げたいと言い出したのはわたしである。そのタイトルのインパクトが幾許かの人々の神経を逆撫でするであろうことは予想できた。それでも担当編集者が許してさえくれたら「不謹慎!」「非国民!」「お前のカーチャンでベそ!」といった誹りは甘んじて自らが引き受けようと覚悟を決めた。ただただ自分なりに震災・津波から東電福島第一原発事故に至る悲劇の連鎖をつぶさに観察してゆくなかで、いまだからこそ読むべき本があるのではないかと、という気持ちが膨らんでゆくのを押さえられなかったのだ。

一冊でもそういった処方箋的必読書を紹介するのが、しばしば東日本大震災以降に符号として膾炙される【自分にできることをする】というスタンスではないか。

ほんとうに様々な書籍のテーマが、あるいは一節が、著者の衷心や危惧が、“想定外”の言葉を目にするたびに脳裏を過(よぎ)っていった。それらはものの見方のブレを糺(ただ)してくれたり、ときに胸の痛みを和らげてくれたり、状況に光を当てて混乱の原因を照覽してくれた。けれど、その即効性において『日本沈没』に描かれている世界を知ることは、かつて書かれたどんな本よりも現在の日本の現実に役立つと断言してもいいだろう。

ごちゃごちゃ説明するより、さしあたって具体的にこの物語に散見される分析の鋭さを理解してもらうことにしよう。

たとえば3・11 当日の夜。パニックに陥らず略奪もなく助け合いながら自宅を目指した東京都民の姿を映す報道に接して、外国人たちは「すごいぞ日本人」と感嘆した。彼らにとっては災害の規模にもまして“想定外”だったようだ。けれど慧眼のSF作家は造作もなく想定してみせる。『日本沈没』でもカタストロフに向かうプロセスで小松左京は東京に大地震を起こさせているのだが、ここに活写される日本人たちもやはり現実と同様に粛々と行動しているのだ。その理由を彼はこんなふう解説している。

一子が親に、「最後は何とかしてくれる」と思い、そう思うことでつながりを保証するような「国に対する甘え」の感覚が、今もなお、大部分の民衆の心の底に根強く、わだかまっており、それが彼らに、「危機における柔順と諦念」の基本的行動様式をとらせていた。

(小学館文庫下巻二二〇ページ)

わたしは四十年近くぶりの再読中にこの箇所に行き当たり痛いほど膝を打った。膝を打ったのはキモチの上でだが、ズキン!ときたのは事実である。なんというクリアな視線。今回、シチュエーションを俯瞰するのにウェブ・コミュニケーション・サービス『ツイッター』が大活躍したけれど、わたしがフォローする幾人もの現代を代表する識者たちですら、ここまで鮮やかに、あの日の日本人の心理を読み解いた人はいなかったように思う。

この本は未曾有の災害に見舞われた人々の心理とアクティビティを鮮やかに切り取っ

て目の前につきつけてくる。それはもう次から次へと。それらのヴィジョンは容赦なくリアルだ。そしてそれゆえ読む者に絶え間ない疼痛を与え続ける。

その痛みは「想定外」の経験をした日本人だからこそ感じるようになった痛みである。ならば、やはり『日本沈没』は「いまだからこそ読むべき本」なのだ。なぜってわたしたちは決して、この痛みを忘れてはいけないのだから。

一自然災害との闘いは、伝統的に政治の重要な部分に組みこまれていた。(中略)国民の中に、災害のたびにこれをのり越えて進む、異国人から見れば異様にさえ見えるオプティミズムが歴史的に培われており、日本はある意味では、震災や戦災や、とにかく大災害のたびに面目一新し、大きく前進してきたのだった。(上巻一五三～一五四ページ)

一カミカゼ的経済発展をつづけてきた日本は、世界一無謀な、世界一人命を無視した戦艦(バトルシップ)のごとき大都市をつくり上げ、(中略)対ロシア戦争の要塞攻防戦から、第二次大戦を経て、今日まで、まったく「同じタイプの失敗」をくりかえしている。(下巻二二～二三ページ)

ミクロな大衆一個人の周章狼狽からマクロな諸外国の反応まで。どれほどリアリティを孕んでいようと、あくまで「お話」であったはずの空想科学小説が予言書でもあるようにピタリピタリと言い当ててゆく様はどこか空恐ろしくさえある。むろん、だからといって日本は沈没などしないだろう。が、もしかしたらこれから何年、何十年に亘って人間が住めなくなる可能性がある半径二十～三十キロもの区域は、その期間、海の底に沈んでしまっているのとどれほどの違いがあるだろう。

この物語にはハリウッド製の災害映画(デザスタームービー)に登場するような紋切り型ヒーローに出番はない。ブルース・ウィリスがたった一人貴い犠牲になって日本人全員を救ってくれたりもしない。しかし、そんなご都合主義の英雄なんかよりも、ずっと確かな希望があるのだと力強く綴られている。悲劇を未然に食い止めることはできなくても、最善を尽くして事態と向き合おうとする、それは政治家と科学者の雄姿だ。

いっそフィクションに近いこの「想定外」の現実世界と、緻密な考証と考察に導かれてたったいまわたしたちが暮らす現実世界に「想定外」に近づいてしまった『日本沈没』の小説世界で、最もリアリティを欠くのが哀しいかな小松が託した希望の部分であろう。

ドラマを動かすのは理想化された「あり得べき」政治家であり科学者だ。嘘っぽくても当たり前かもしれない。けれど、これほどまでに写実味を帯びてしまったら、絵空事とはいえずそこに描写される彼らの肖像もまた似ていなければむしろ不自然。事実、最前線に立つ救助隊や技術者の献身は今回の活躍を見ていたようである。それが政界と象牙の塔の住人に関しては、もはや本書が皮肉にしか感じられないなんて。ベストセラーになってから四十年足らずで彼らは本質的に変わってしまったのだろうか。

それでも、功成り名遂げながら「口を噤(つぐ)んでいたほうが賢明だと解ってはいるが」と前置きして、かつて己が下した決定を謝罪した老研究家がいた。御用学者と陰口を叩かれていたのが毅然と意志を表明して、お上に反旗を翻し思いがけずアカデミズムの良心に触れて驚かされたりもした。それらは『日本沈没』のワンシーンとして書かれていてもおかしくない出来事だったといえなくもない。

一方、政治家はというと、9・11のときアメリカの大統領がブッシュだったように日本も最悪の巡り合わせの上にあったのかもしれないと誰もが目頭を押さえなくなる惨憺たる有様であった。ただ読後の目で彼らを眺めると、その言動の裏にある思惑や焦燥、動揺や萎縮が申し訳ないくらい見えてしまう。もちろん今回のことを切っ掛けに、至極真っ当な提言ができる政治家にスポットが当たったのも事実だけれど。

もっとも東日本大震災は人間の心理をも揺さぶって誰彼の別なく地金を露呈させてしまった。みんな人造人間キカイダーのように半分中身が透け透け状態である。つまりは心情が文字になって書かれている小説の登場人物のごとくに解りやすいのだ。そうなると、もはやハッターは利かない。あるがままの本性を突きつけられて慄然とすることも多かった。小説では活躍の余地がなかった経済学者などがいい例だろう。

個人で百億円の義捐金をポンと投げ出した上で、復興計画として太陽光と風力による発電設備を推進する構想を提唱した事業家がいたり、トヨタの社長が浜岡原発停止に対して「迅速な決断に敬意を表したい」と発言したり、財界人が意外や天晴れな態度を示す傍らで、一貫して人の情緒が読めない発言を繰り返す経済学者たちが頗る目立った。結局は損得勘定でしかモノゴトが捉えられない頑迷固陋を晒してしまったのは、まことに情けない。

スポーツ選手の単純すぎる単一思考を揶揄して「筋肉脳」と呼んだりするが、迷惑がかからないだけ彼らの「資本主義脳」よりもマシである。『日本沈没』は当初、複数巻となる予定だったという。出版社の要請で短縮されたのだそうだが、もしももっと長かったら、きっと小松左京は経済学者に最大の敵役を振ってくれたのではないかと思う。

おエライ先生方が“想定外”と口にするとき、それは科学の叡智を以てしても予想することができなかった、という意味ではない。想定するまでもない荒唐無稽であると鼻で笑って予想しようとしなかった事態に陥ったという意味である。いわば怠惰の言い訳でしかない。一『日本沈没』(のリアリティ)が教えてくれる最大の教訓である。これを肝に銘じておくだけでもわたしたちはずいぶん注意深く生きられる。

津波に襲われたある海辺の村では、過去の教訓を元に高台に置かれた石碑に刻まれた「ここより下に家を建てるな」の言葉を守り被災者を一人も出さなかったという。ならば地震に伴う最悪の“想定外”であったところの津波禍は、実際には“想定外”でもなんでもなかったわけだ。少なくともかそけき海辺の村落にいた、なんら科学的知識もモダンテクノロジーも持たぬ名もなき先人が災厄の到来と回避の方法を見通していたのは紛れもない事実なのだから。

いま『日本沈没』を読むということは、自分のなかにこの石碑を立てるということである。

おのおのの辛い経験から得た知識を碑文にしてそこに刻むために。

読書は娯楽だ。どんなときでも、その根本は揺るがない。だが、ときにそれは他者のために【自分にできることをする】行為にもなるのだ。

被災地で介護ボランティアを続ける看護師さんのブログが英国で話題になり、大手出版社が翻訳して本にしないかと彼女に持ちかけたという記事が、先日高級紙ガーディアンに掲載された。しかしその女性はいかなる形であっても自分の体験がお金に換算されるのが生理的に耐えられないと断ったそうだ。

前述したような経済学者にはそんな感情は理解できなからう。けれど『日本沈没』を読んだわたしには彼女の気持ちが推し量れる。それがとても嬉しい。